特集

知る人ぞ知る北本市の文化財

石戸城

［いしとじょう］

埼玉県
選定重要遺跡

石戸城跡は石戸宿6丁目に所在します。城跡のすぐ北側にはこの春に多くの花見客でにぎわった城ヶ谷堤（桜土手）が接しています。東側には埼玉県の自然観察公園があり、多様な自然を身近に楽しめるエリアが広がります。このあたりは起伏の富んだ地形とあいまった里山の景観が人気で、四季を問わずたくさんのハイカーが訪れる場所でもあります。

城としての役目を終えてから400年あまり、関東地方で覇権を争った戦国大名たちの舞台ともなった石戸城は、現在こうした雑木林や農地の広がる風景の中にひっそりと埋もれています。

果たして城として実際の構造や役割はどのようなものであったのでしょう。残された文献や絵図、発掘調査などから知られるその姿は、実は意外にも防御に堅牢さを持ち、地理的にも重要拠点として位置づけられていた姿が浮かびあがります。

今回、近年の調査成果から垣間見えた石戸城を紹介します。

石戸城跡東側の谷地

谷は水が流れる沼となっており、城を防御する役割がありました。

上空から見る
石戸城跡（北から）

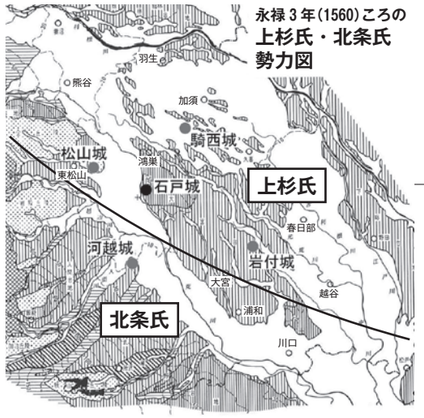
三方を谷に囲まれた城郭の姿がよく分かります。南側は細長い地割の家並みが並んでいます。

城の存在と、構造・立地を語る物語

其の一

石戸城の戦い

関東で勢力を伸ばす北条氏 拒む上杉氏との激戦



永禄3年（1560）ころの
上杉氏・北条氏
勢力図

石戸城をめぐる戦国武将たち

北条氏は現在の小田原市を拠点に栄えた戦国大名です。後に関東全域を制覇し、豊臣秀吉に敗れるまで東国の雄でした。

北条氏が石戸城に狙いを定めている文書が残っています。それは、小田原から石戸へ行くには許可書を携えよ、との北条氏綱の命令です。これは大永四年（1524）に発せられていますが、このときまだ、石戸城は北条氏の勢力下にはなかったと考えられます。松山、岩付、河越、忍へ通じる交通の拠点である石戸を押さえておきたい魂胆が伺えるものだとされています。

北条氏綱は翌大永五年（1525）太田資頼が守る岩付城を奪います。太田氏は上杉氏に与する南武蔵の地侍でありました。上杉氏は公には関東を守る役目を室町幕府から与えられていたので、関東で勢力を伸ばす北条氏とは敵対関係にありました。当然ながら、太田氏とも対立が起こり、このときは岩付城が内通者のため落ちてしまい、城主である資頼は城を抜け出し、石戸城に避難して再起を図ったと伝わっています。

さて、これから40年ほど後の永禄六年（1563）、吉見町に所在する太田資正配下が守る松山城が武田信玄、北条氏康の連合軍に攻められました。松山側は篭城を決め、当時越後にいた上杉輝虎（後の謙信）に救援を求めます。輝虎は直ちに兵を整え、雪の上越国境を突破し二月上旬に石戸城へ着陣します。ところがこのときすでに松山城は開城し、輝虎は目的を達せず短期間の逗留の後帰国しました。

輝虎の松山城救援失敗は、石戸城の運命も大きく変えたようで、翌永禄七年（1564）には、長く敵方であった北条氏の勢力下に組み込まれることになりました。

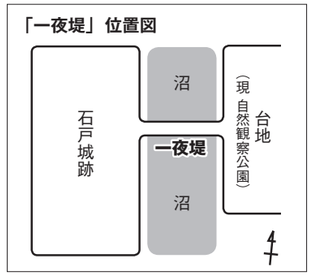
この後、石戸城に関係する資料は残されていませんが、おそらくは徳川家康が関東へ入った天正一八年（1590）以降に廃城になったと考えられています。

石戸城をめぐる戦いの伝説

江戸時代に書かれた軍記物には、永禄五年（1562）、寄居町の鉢形城主である北条氏邦が石戸城攻略を狙うくだりがあります。このとき城を守る毛利丹後守は奮戦して、氏邦側を何度も撃退し、城は容易に落ちなかったといわれています。

しかし、攻めあぐねた北条方が、城の東側へ夜陰に乗じて土堤を造り、これを足場にして沼地を渡って、石戸城を攻め落としたとの伝説が残されています。

このときの堤は「一夜堤」といわれ現在でも自然遊歩道の一部として残されています。



一夜堤は幅2m、長さ50mの規模です。台地に挟まれた谷幅が一番狭い場所に造られています。

一夜堤越しに石戸城跡を望む

其の二

天然の地形を巧みに利用

石戸城跡 徹底解剖

交通の要衝としての立地 堀や土塁により防御に長けた構造

石戸城の立地

石戸城は市域の西部を流れる荒川沿いに築城されていました。城は今から約550年前に造られはじめたと考えられていますが、当時は近くに渡舟場があり、それに伴う宿場がすでに作られていたと思われます。宿場は地元で「鎌倉街道」と呼ばれる古道の両脇に家並みが並んでいました。

鎌倉街道は石戸宿から南へは桶川、上尾を通過し、鎌倉府（室町幕府が関東を統治するために設置した機関）に到達します。また北上すれば群馬、新潟方面へ至ります。さらに宿場の中央部を東西に横切る街道は、俗に松山街道と呼ばれた幹道から分かれた枝道で、荒川の流れを船で対岸に渡り松山城や河越城へ至るものでした。このように、陸上と水上の交通が交わる地点に城は築かれていたのです。

石戸城の構造

城自体は台地上の高所に造られていました。上空から見ると台形をした土地が、北、東西は自然の大きな谷に囲まれ、天然の地形を上手に利用していました。また、南は宿場が縦長に形成され城の防御の一端を担っており、さらに城域の区切りに幅が広く深い堀が造られていました。

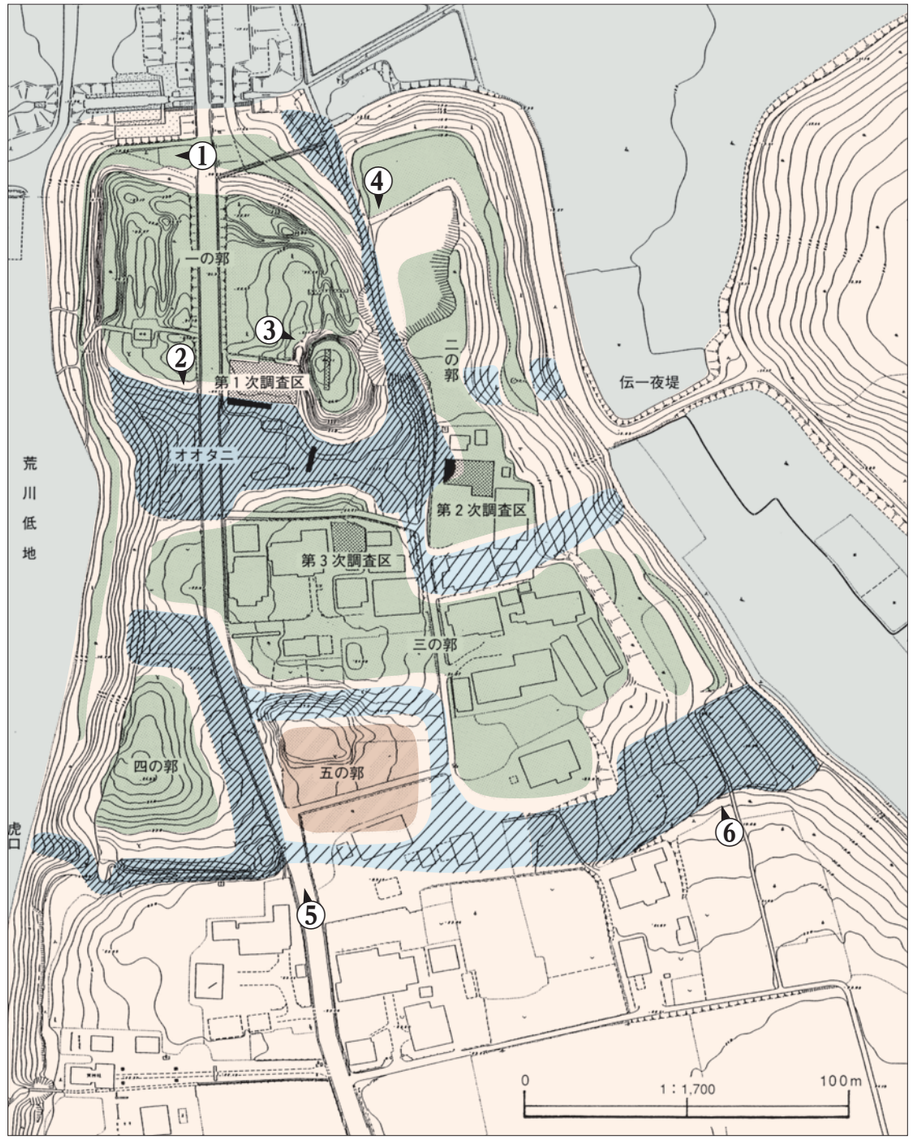
城跡を示す建物等は現存しませんが、城を防御する土塁や堀跡が残されています。

城跡は基本的に堀と土塁で区画されます。この区画を「郭（くるわ）」といい、石戸城は五つの郭で構成されていたと考えられています。郭の名前は伝わっていなかったことから、現在は仮に一から五の郭と呼称しています。

このうち一の郭はいわゆる本丸と考えられている範囲です。城の北西に位置し、郭の南には幅20m、深さは5mを超える大規模な堀に画されています。堀は台地の中央で折れ曲がり、北へ抜けていきます。防御が厚かった一の郭は城の最重点区画であったことが考えられます。

二の郭は一の郭の東側に位置し、三の郭は東西方向で中央部に設けられています。ここは居住建物が集中していたと考えられます。四の郭は城の南西隅の小さな区画で、五の郭は南側中央部にありました。この二つの郭は城の虎口（こぐち）（入口）と南側への防御に関係ある施設が設けられていたと思われます。

また、台地の縁を道路状の平らな施設が巡っています。これは腰郭（こしくるわ）とよばれ、各郭をつなぐ役目がありました。

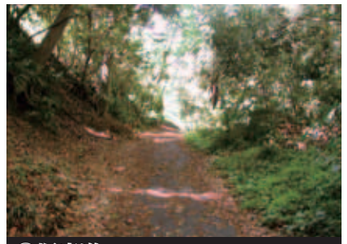


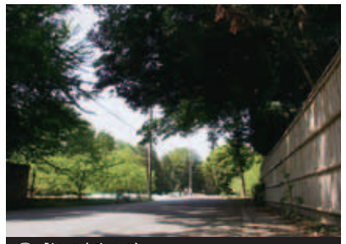
石戸城跡の郭（くるわ）想定図
石戸城はおおむね台地を東西方向の堀で区画し、五つの郭を形成している連郭（れんかく）式の城郭です。

①腰郭［こしぐるわ］
台地の斜面地を水平にカットすることで通路としての機能を持たせ、各郭をつなげていました。

②オオタニ
地元で「オオタニ」と呼称する一の郭を区画する大堀でした。幅は20mを大きく越える規模です。

③やぐら台跡
高さ2m長さ15mで楕円形をしています。一の郭の南東隅にあり台地中央の最高所に造られています。


④堀底道［ほりぞこみち］
「オオタニ」が埋没する過程で道路として使用したため、堀の形状が見える形で残されています。


⑤虎口（入口）［こぐち］
城の入り口のことを言います。食違いの堀と門をつくり、敵の侵入に備えていたと考えられます。

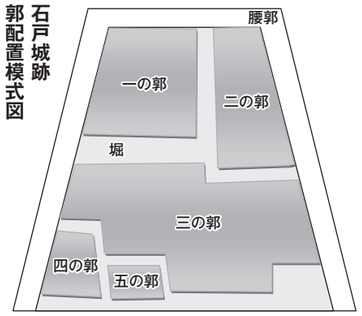
⑥南部堀跡
南部の堀跡の現状です。写真は東部分ですが、急激に落ちこむ堀の形状を見ることができます。

其の三

城の昔と今をつなぐ歴史の足跡

発掘調査で明らかになる石戸城

石戸城跡における考古学的な発掘調査は断続的に行われています。いずれの調査も重要な所見を得ています。



石戸城跡 郭配置模式図

第一次調査

一の郭南側を対象に行われました。調査では地元で「オオタニ」と呼ばれる一の郭を区画する堀跡の一部を調査しました。このとき約5mまで掘り下げましたが、底に達することができませんでした。

第二次調査

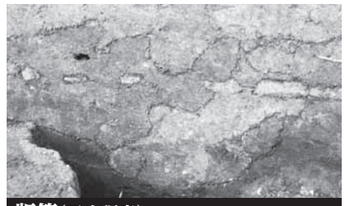
二の郭の西部を調査しました。その結果西から伸びる堀が北へ向きを変えるコーナーが確認され、堀と郭の境界部分をはじめて明らかにしました。

堀跡(二次調査)

堀(オオタニ)が屈曲するコーナー部です。この部分で推定で幅20m、深さ5mの規模と考えられます。

第三次調査

三の郭北辺の一部について調査を行い、城に伴う建物跡をはじめて確認しました。また、建物を建てる土台を造る際に、性質の違う土を交互につき固めた土地造成を行っていることが明らかになりました。



版築(三次調査)[はんちく]

異なる性質の土を交互につき固めて、建物を支える土台としていました。

内容確認調査

一と四の郭では城跡の保存状態を確認するための調査を行いました。

一の郭にある南東隅の基壇(だん)状の高まりは、現在櫓(やぐら)台として考えられている遺構です。櫓台は頂を平坦にし、人為的に盛り上げられていることを確認しました。また郭全体に版築技法が施され、これを土台とした四棟の建物跡が見つかりました。また、仏像が1体出土し、仏堂などがあったことも想定されます。

四の郭の調査では、従来想定されていた南側の堀跡の位置がやや北に掘られていたことが判明し、さらに幅14m、深さ5mを越える大規模なものであることが確認されました。また、土塁の痕跡が明瞭に残っていて、南からの敵を防ぐ重要な防御区域であったことが確認されました。

建物跡

素掘りの穴に柱をすえて建てる掘建柱建物跡です。柱の太さは10cm程度で平屋建と思われます。

集落の遺物(矢じり・古銭出土状態)

古銭は中国からの輸入銭でこの時期広く流通した「永楽通宝(えいらくつうほう)」です。矢じりは鏑矢(かぶらや)のようです。

仏像の出土状態

一の郭の内容確認調査中に発見されました。壁につるす懸(けん)け仏で、阿弥陀如来だと思われます。

宿場の調査

石戸城の南に連なる家並みは建物こそ現代のものですが、地割りの間口や奥行きが戦国時代から変えられることなく残されている、県内でも稀有な例とされています。

ここにあった家々は石戸城を支えていた人たちの住まいだと考えられています。戦国時代では集落と城は近接していました。外敵の襲来にあって、城は集落の人たちが逃げこむための施設でした。また、遠征してきた味方軍の逗留先としても使われていました。

家並みの南部を発掘調査した際には、およそ450年前の石戸城下の集落遺構が確認されました。隣地の境には柵を設けた小穴が並んで確認されました。また、地割りに平行して建てられた建物や倉庫や地下室も見つかりました。

遺物では古銭や矢じり、刀の鍔(つば)、死者の供養のために造られた板石塔婆、焼かれた米などが確認され、城下集落の生活の一端が明らかにされました。

集落の調査

掘建柱建物の柱穴が等間隔で並んでいることが分かります。建物の地下に倉庫を設けていました。

石戸城跡の整備を行います。

石戸城跡は埼玉県の選定重要遺跡に位置づけられています。そのため**平成25年度には遺跡を将来まで良好な状態で伝えることを目的に、保存管理に係る整備実施計画を策定しました。**

荒川方面の自然と、堀跡などの復元により再現する歴史的景観を、同時に望めるように整備する計画です。地域学習の場として、また、外から訪れた人が中世城郭の特徴を体験できるような観光資源としての位置づけを目指します。

予想図

次号の特集は「北本市の水について」を予定しています。

コラム

上杉輝虎(謙信)軍の石戸着陣を裏付ける!?伝説の碑

逆さ椿

[さかさつばき]

逆さ椿の碑

宮岡氷川神社がある高尾8丁目のそば畑の中に「逆さ椿」の碑とよばれる石碑があります。これは上杉輝虎(謙信)が石戸進出のおり、炊事で使った棒杭が根付いて大きな椿の木になったとの伝説を記念するものです。椿は枝が下方を向いて伸びたため、逆さ椿とよばれました。

平成19年に逆さ椿の碑から東へ90mの地点で大きな堀跡が発見されました。このとき地形などの観察により一町(108m)四方の館跡が確認されました。時代は輝虎が石戸へ出陣した時期に符合しています。

この館にも上杉軍が入ったと考えられ、石戸着陣という史実と伝説が結びついた発見となりました。

宮岡氷川神社前遺跡調査